

普及現地情報

たじまピーマンの安定生産に向けた接ぎ木苗の普及

ピーマンの青枯病対策として抵抗性台木を用いた接ぎ木苗に摘花管理を組み合わせることで、発病を約 90%抑制し、収量を確保できた。摘花の適正管理により初期生育が確保され、接ぎ木苗の弱点を補い、安定生産が可能となった。

背景

但馬地域の「たじまピーマン」(179 戸、12.1ha (2025 年現在)) は、青枯病の多発による減収が問題となっている。

この対策として、2019 年度から青枯病抵抗性台木「台パワー」を用いた接ぎ木苗の導入に取り組んできた。しかし、接ぎ木苗は高い防除効果を示したものの(写真)、初期生育が緩慢で収量が低下しやすく、普及が進んでいなかった。

そこで、2022 年度に接ぎ木苗に摘花管理を組み合わせた栽培技術の検討を行い、初期生育の確保と収量向上が可能であることを実証した。

内容

1 接ぎ木苗の適切な管理ポイント

接ぎ木苗による安定生産には初期生育の確保が最も重要であり、以下の管理が効果的である。

(1) 摘花による初期生育の確保

接ぎ木苗は初期に着果させると樹勢が低下し、その後の収量に大きく影響する。そのため、定植後は少なくとも二番花までは早めに摘花する(図 1)。摘花技術を確立するための実証ほを設置し、実証区は三番花まで摘花した。その結果、実証区は摘花しない対照区よりも 40cm 以上草丈が伸び、実生苗と同等以上の草丈を確保できた(図 2)。

また、三番花まで摘花した場合、作業時間は 10a 当たり約 9 時間を要した。これを効率化するためには、誘引等の作業と競合しないように、開花初期から早めに計画的な作業をすることが重要である。

(2) 樹勢管理と誘引方法

接ぎ木苗は枝が横に広がりやすく、樹勢が低下しやすい。そこで、樹勢を確保する目的で早期から枝を立性に保つように誘引する。これによって、ネット張りや誘引作業の効率が向上する。

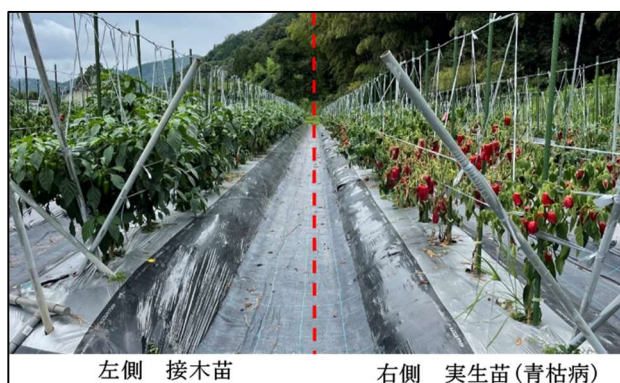


写真 青枯病発病状況の比較

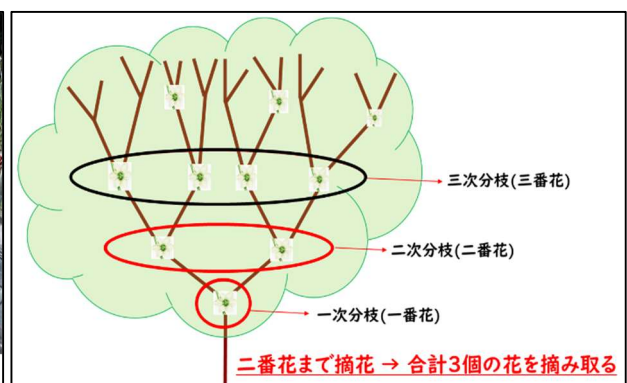
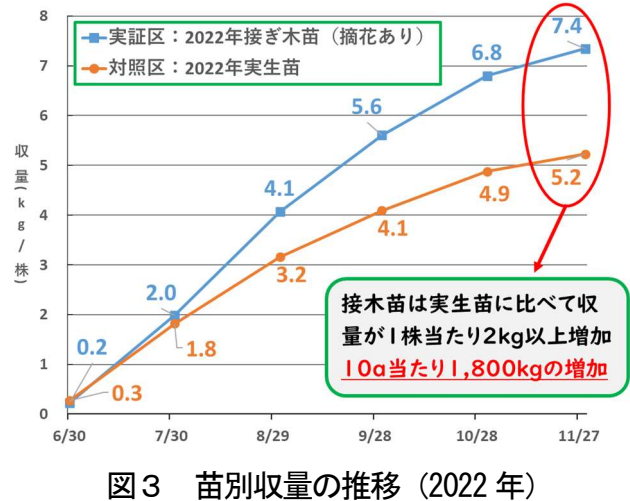
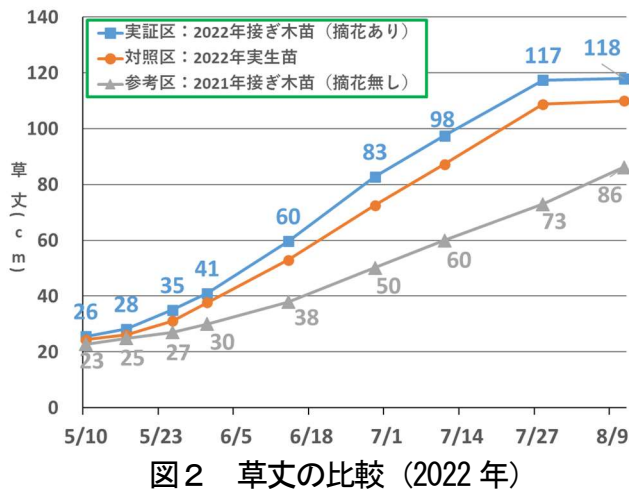


図 1 摘花実施箇所

2 接ぎ木苗導入の効果

接ぎ木苗の導入により、青枯病の発病抑制効果が確認された。実生苗では発病率 100%を示したほ場においても、接ぎ木苗では 10%に低減された。

接ぎ木苗は、摘花することで収穫開始は対照（慣行）より約 10 日遅れたが、その後の着果数が増加したことから、総収量は向上した。実生苗と比較して 1 株当たり 2kg 以上増収し、10a 当たりでは約 40%（1,800kg）増加した（図 3）。特に 2023 年は産地内で青枯病が多発したが、接ぎ木苗では被害が軽微にとどまり、収量の大幅な低下を防ぐことができた。



今後の方針

接ぎ木苗は青枯病対策として有効であるが、安定生産には摘花技術の習得が不可欠である。2026 年度現在、接ぎ木苗の普及率は但馬全体で約 8 割まで増加している。今後は、摘花の適期作業の徹底と、JAたじまと連携した現地指導を強化し、さらなる普及と技術の定着を図る。

川濱 大靖（豊岡農業改良普及センター）